

## パレスチナ:名産の甘いスイカ再び 日本が技術支援

毎日新聞 2015年05月19日 10時29分 (最終更新 05月19日 13時48分)

【アインアルベイダ (ヨルダン川西岸パレスチナ自治区) 大治朋子】イスラエルが占領するヨルダン川西岸パレスチナ自治区のアインアルベイダ村で18日、日本の技術支援で栽培したスイカの収穫祭が行われた。西岸では、1990年代ごろから土壌の悪化が深刻化。名産のスイカ栽培が不可能になりイスラエルからの輸入に頼ったが、日本の支援で再起し、地元の期待を集めている。

西岸はかつて、ヨルダンやサウジアラビアなど周辺諸国にスイカを輸出していた。しかし、限られた土地で繰り返し栽培したことなどから土壌が悪化。90年代に入ると、スイカを栽培していた約30平方キロの農地はほぼ使用不可能になった。

日本政府と国際協力機構 (JICA) は2011年9月、スイカ栽培の技術提供プロジェクト (支援総額約5億円) を始め、害虫に強いかぼちゃやユウガオの台木にスイカの芽を接ぎ木する技術を提供した。本格的な収穫は昨年に続き2年目で、この日の収穫祭には大久保武・パレスチナ関係担当大使や自治政府のシャウキ・アイサ農相らが参加、取れたてのスイカを試食した。糖度は10%で、みずみずしい甘さが口いっぱい広がった。

JICAの技術普及担当、大沼洋康さん (63) は「接ぎ木は繊細な作業が必要。その後の温度や湿度の管理も難しいが、農家の皆さんと協力して実現できた」と話した。自治政府で農業技術の普及を担当しているハシム・サワフタさん (40) は「名産だったスイカがまた育てられるようになりうれしい。今年は昨年の1.4倍の生産が見込まれている」と語った。



採れたてのスイカを試食するシャウキ・アイサ・パレスチナ自治政府農相 (右) と大久保武・パレスチナ関係担当大使 = ヨルダン川西岸パレスチナ自治区で大治朋子撮影